

# 第46回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。  
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

## 中学校1年生の部 最優秀賞 自主的に挑戦する姿勢

弟子屈中学校 大嶋 景奈さん



皆さんに尊敬できる方、すごいと思う方はいますか。私は伊達政宗がすごいと思います。

伊達政宗という本を読みました。実際に政宗が行ったことが書かれています。

政宗は幼いころに疱瘡(ほうそう)という伝染病にかかってしまい、母の義姫は、政宗の弟の小次郎をひいきします。疱瘡にかかって目がとまはれていると知って悲しんでいる政宗の目を家来の片倉小十郎が切り落とします。このことから、有名な独眼竜が誕生します。十一才で元服し、十三才で結婚。十五才で初陣です。相馬氏と戦いました。そして三年後には相馬氏と和睦し伊達家を相続しました。ここで私が思うのは政宗は若いときから戦に関わっているということです。

二十四才のときに政宗は秀吉から小田原参陣を命じられました。東北でたくさんさんの戦に勝利していたから秀吉に声をかけられたのだと思います。

年を経て、政宗は外国の文化を取り入れ、貿易をしてさらに豊かな国づくりを目指そうとしました。使節を送り、ヨーロッパの国々と貿易

をするために幕府の許可を得て大型の船をつくりました。

そしてヨーロッパの国々に渡り使節が会見を行っているときに、江戸幕府はキリスト教を禁止する命令をくだしたため、政宗の海外との貿易で豊かな国づくりという望みも消えてしまいました。しかし、当時誰も行わなかったヨーロッパとの貿易で、幕府を倒そうと計画したのはすごいと思います。

このように本を読むことで武士の行ったことのがわかり、武士の行ったことを様々な視点で考えることができるという良い機会になると思います。また、私は伊達政宗の行動力を知り、改めて理解することができました。

幼いころにかかった疱瘡により右目を失っても夢をあきらめず挑戦し続けたのは大変ですが、とてもすごいことだと思います。

私は伊達政宗の「自主的に挑戦する姿勢」に習って行動したいです。私一人で豊かな国づくりを目指すのは難しいですが、豊かな国づくりに限らず、他の人のため、地域のためにだと、自分のできることはあると思います。進んで挨拶することや、ポイ捨てしないことなどで。普段当たり前のように行っていることも結果的に自分のためにもなっていると感じました。

挑戦という姿勢を身につけそれが結果的に自分のため、他の人のため、部活などのチームのため、地域のためになるような行動ができるような人になりたい

です。そのためどうすれば良いのかをしっかりと考えて行動に移りたいです。

書名

『伊達政宗 独眼竜の挑戦』

浜野 卓也 文

(寸評)

本を読み、見たことのない過去の歴史に思いを馳せる。読書の魅力を体現したような読書感想文を書いてくれました。現代と当時では、置かれている環境が大きく異なり、今では当たり前に行えることも、当時は困難を極めた中で実行した伊達政宗の生き方に感銘を受けたことがよく伝わる文章でした。ぜひとも大嶋さんも今後とも、伊達政宗のように挑戦する心を持ち続けていってほしいと思います。



## 中学校2年生の部 最優秀賞 コンプレックスと生き方

弟子屈中学校 樋川 万稀さん



近年、コンプレックスを持つ若者が多く見られるようになってきた。かくいう私も、コンプレックスを持つ若者の一人である。何故コンプレックスの話を読んだか、それは私が夏休みの間に読んだ物語に、それと関係するものがあつたからだ。話題を出したのだ、もちろん今回はその物語を読んだとどう考えたかなどを書いていこうと思う。

私が読んだ物語は、芥川龍之介の短編集にある「鼻」という話だ。「鼻」の大きくならずじは、上唇の上から顎の下まである鼻を持つ和尚がそれを気にし(コンプレックスに思い)、実際より短く見せようと鏡に向かっている。色々な角度から顔を映すなどして四苦八苦するのだが、やっと短くすることのできた鼻を人に笑われ、最後には鼻は元の長さに戻っている、というものだ。そしてその鼻を短くする方法というのが、弟子の僧が医者から教わったもので「お湯で鼻を茹で、人に踏んでもらう」方法である。私は本編を読む前に母にあらすじを聞いていたが、寝起きだったこともあってか言っていることがしばらく理解できずにいた。本編を読んだあとも、何をどう考えたらそのやり方にたどり着いたのか、

そもそもその和尚さん以外に鼻がそこまで長い人がいたのかなどと色々考えてしまふほど衝撃的な方法だと私は思う。これが「鼻」を読んだあとの一番大きな感想だ。大きな感想というの、そこばかりが気になっていて印象的だから大きいだけなのであって、他にも感想はある。例えば、和尚さんは努力家ではあるが、鼻に関しては努力次第どころかそれは努力でどうにかなるものではないというところが哀れに思えてくる。などだ。

その感想の中にも、感想という名を借りた私の考えがある。それは「コンプレックスが人に与えるもの」についてだ。「自分が鼻を気にしていることを人に知られるのが嫌だ」などと思っていた和尚が、鼻が以前の大きさに戻った時に、はればれとした気持ちになったのはどうしてなのか。この疑問自体には、「鼻が短くなったのに周りの人が笑い、中童子が馬鹿にしてきたことから、かえって鼻が短くなったのが恨めしくなった。が、一晩のうちに鼻が元の長さに戻ったため、鼻が短くなったせいで笑われていたことから解放され、こうなればもう誰も自分を笑う者はいないに違いないと思っただから」という答えがある。しかし重要なのはその疑問に対する答えではなく、「どうして和尚の周りにいる人々は笑い、中童子が馬鹿にしていたのか」という点と、「和尚はどうしてあんなに笑ってしまったのか」という点だ。一点目は、本編に書かれている「人間の矛盾した二つの

感情」が関係するだろう。本編から引用すると「誰でも他人の不幸を同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切り抜けることができると、今度はこつちで何となく物足りないような心持ちがする」と書かれている。加え、不細工だからという理由で馬鹿にしたり笑いものにされることがある。つまり鼻が前の長さの時も短くなつたあとも、笑われ、馬鹿にされていた理由として「不細工なのが面白いから」「短くなつたらなつたで物足りないから、またあの長さに戻らないかと思つている」だろうと考えている。二点目は、和尚のコンプレックスである長い鼻をやって短くすることができたのに、笑われ馬鹿にされてしまったことが一番の原因だと捉えている。むしろそれしかないのでは、とも。答えがそれしか導き出せない。どうしようか書こうかできないが、コンプレックスだった部位が望み通りのかたちになったとしても、目に見えるところで笑われ馬鹿にされるか、表面上では共に喜びを分かちあつてくれたとしても裏では散々言っているか、純粹に喜びを分かちあつてくれるしかないのになんとも度し難い。

私は「鼻」を読んで、今も昔も聖人悪人関係なしに人間がどれくらい面倒くさくて見るに堪えない生き物なのかを理解できた。そして私も、面倒くさくて見るに堪えない生き物の一人だということも。それから、「鼻」を読んで再確認できたことがある。色々調べて読んで考え

たからといって、生き方が変わるなんてことはこの先きつとないということだ。本を読んで色々考えていくうちに考え方が変わっていく、へらいしかこの先の変化はないと思つている。つまり、私は私の生き方で生きていこうとやんわり思つたということだ。

書名

『羅生門・鼻芋粥』

芥川 龍之介 著

(寸評)

人は誰も大なり小なりコンプレックスを抱えながら生きています。これは当たり前なことですが、そのコンプレックスを克服することで、より強い自分に出会うことができます。まさしく樋川さんの感想文は登場人物の立ち居振舞いに対して「自分だったらどうする」といった考え方をもち、自分のこれからの生き方についても、思いを巡らせている奥深い考え方が垣間見えた感想文だと思います。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。  
※生徒の学年は、コンクールが行われた令和3年度当時のものです。